

1. 市民意識の動向

都市社会の変化を占う場合、大きく分けて2つの側面からのアプローチがある。ひとつは産業経済や都市環境等について実態面の動向把握とその予測である。今ひとつは、都市に住む人間行動とその心理的側面の変化、つまり市民自らの生活意識と行動、価値観の変化の把握である。以下、記述されるが、たとえば行政計画に際して、市の政策に対する市民意識（評価・要望）の動向は政策決定に影響を及ぼすことが経験的に知られている。それは、世論という市民力である。ただ世論はサイレント・マジョリティであり、多くは黙して声をあげない。従って、まちづくりを占う場合に、“人々は何を求めてきたか”を念頭におきながら、過去から現在に至る市民意識（声なき声）を客観的にとらえなおし整理することは、われわれの目指す「次世代のまちづくり」のシナリオにも大いに参考となるであろう。

概して、ハード面のまちの変化は経済発展や技術革新による豊かさの実現に左右されるところ大であったがそれだけではない。まちは、時どきに移ろいやすい人々の意識と行動のあり様によっても変わる。自由時間の使い方、働き方、住まい方、生活価値観、人間関係等、微妙に揺れる都市の生活様式は、それぞれの都市における生活者の意識と行動の積み重ね、いわば“意識と経験の蒸留”となって都市の姿と重なり合う。

本章では、まず、およそ30年間の行政施策に対する市民の要望と評価の推移によって、人々が「まちづくり」に何を求めてきたのかをみる。次いで、都市生活者がもつ生活実感としての住みよさ、生活環境評価の様子に検討を加え、さらに、都心居住に関する市民意識等を既往のアンケート結果によって概説し、後出の「次世代の生活像」へ繋げることとする。

1-1. 市民の行政施策に対する要望と評価

ここでは、まちづくりの担い手としての行政に対して、およそ30年前から現在に至るまで行政施策に対する市民要望と施策への市民評価の系譜をみる。なお、本稿では、一世代を30年として扱うため、「次世代のまちづくり」は、概ね2030年以降の都市像を想定している。

1-1-1. 市民が行政に求めた優先施策の推移

(1) まちづくりに対する市民要望

-1976年～1990年-

1) 時代背景と生活意識

周知のように70年代以降、1973年のオイルショックを契機にそれまでの高度成長路線にピリオドが打たれわが国は低成長を余儀なくされた。折から公害問題や交通事故の漸増等経済成長の歪みが露呈し始めた時代でもある。しかし、再び活力を取り戻した経済は80年代に黄金時代を迎え、それが加熱した反動から後に、いわゆるバブル経済とその崩壊を迎えることになる。

北九州市では、オイルショックという時代の転換期に機敏に反応して1974年に基本構想を策定。これまでの経済重視路線から「福祉都市」優先を掲げたことは注目される。ちなみに、市が目指す都市像のトップには「豊かな暮らしをまもる高福祉都市」が提唱された。

この時代の生活者志向は、オイルショックの影響もあり、何とんでも使い捨て・大量消費から、節約は美德への行動転換であり、人々の価値追求は「モノ」から「こころ」へと移行した。そして80年代には、「生活の質 (quality of life)」や「都市アメニティ」が都市生活、都市空間に求められ、いわゆる消費の成熟化が浮き彫りとなってきた。

2)「まちづくり」に望むのは、生活基盤充実からソフト施策充実へ

市民の市政に対する要望を探るため、北九州市では継続的に市民意識調査（注1）が行われ現在に至っている。ここでその結果を簡潔に記述する。

この時代、24項目の施策（表1-1）のうち、特徴的なのは上下水道、ごみ・し尿等「生活基盤」の要望が低下、「自然・環境」も同様に減少傾向にあったことである。これは、市域全体にわたる生活インフラの目覚しい整備推進や総力で取り組んだ公害克服の成果が市民意識に反映した結果である。相対的に要望が増えたのは、「教育・文化・スポーツ」等でありソフト施策への要望が高まりを見せたのも特徴的である。なお、87年以降、90年まで（注2）は、「環境保全」「駐輪・駐車」さらに「健康・福祉」等の要望が高まりがみられた。

表1-1 市政要望の項目分類表

生活基盤	交通
1. 上水道	15. 交通安全
2. 下水道	16. 生活道路
3. ごみ・し尿	17. 幹線道・自動車道路
4. 市営住宅	自然・環境
5. 消防対策	18. まちの美化
6. 救急医療	19. 公害対策
7. 公園・遊び場	20. 自然保護
健康・福祉	産業経済
8. 心と体の健康	21. 中小企業育成
9. 年長者福祉	22. 産業・貿易振興
10. 心身障害者福祉	23. 農・漁業振興
教育・文化・スポーツ	24. 消費者保護
11. スポーツ	
12. 教育・非行防止	
13. 文化・コミュニティ	
14. 人権	

(2) まちづくりに対する市民要望

-1991年～現在-

1) 時代背景と人々の志向するもの

振り返れば「失われた10年」といわれたのが90年代であったが、長引く不況下であって、その犯人探しは金融政策やデフレ経済にも向けら

れた。たしかに「土地・株価、消費拡大、終身雇用」という3つの神話は崩壊し、このことは人々のライフスタイルや生活設計にも大きな影響を及ぼした。当然、都市での住まい方、暮らし方の選択肢も変化せざるを得ない時代へと進んだ。

この時期の都市政策の大きな転換は、1988年の北九州市ルネッサンス構想に掲げられるように、これまでの多核都市論を改め、都心・副都心を明確に規定したことである。これにより、小倉と黒崎をそれぞれ活力と魅力溢れる都市の中核と位置付け、両地区に高次の都市機能を集中整備することとなった。折しも、わが国における経済社会のパラダイムシフトの時機に、本市では、まちづくり理念のシフトが起こったわけである。

生活意識面では、1992年のわが国「生活大国5カ年計画」にみられるように、人々はより高次元の生活の質を求め、個性化・多様化と自己実現が志向される時代となった。しかしながら近年には、本格的な少子高齢化や人口減少社会が到来し、一方で、フリーターやニートの出現等、若者の雇用環境の悪化を背景としていわゆる所得格差社会が生まれ始めた。こうして市民生活の安全・安心志向が強く意識される時代となる。その意味で現在は、成長時代と成熟時代の「光」と「影」が交錯する時代ともいわれている。

2) 要望には高齢社会問題や、やはり安全・安心、健康志向が色濃く反映

①上位ベスト3の動向

90年代になると、行政が取り組む36項目の施策（注3）のうち、ごみ・し尿等「生活基盤」の要望が低下、1991年のベスト3をみると、第1位が「高齢社会対策の推進」で、2位は「駐車対策」、3位が「防犯、暴力追放運動の推進」となっている。一方、直近の2004年度の結果では、第1位が「高齢社会対策の推進」で変わらず、2位は「防犯、暴力追放運動の推進」、3位が「保健医療の充実」となり、安全・安心や市民の医療・健康への関心が高まりがみられている。

②10年連続で要望トップの「高齢社会対策の推進」

やはり高齢社会問題が、行政に要望する市民の最優先課題であることに揺ぎはないようである。周知のように北九州市の高齢化率は21.3%、大都市のなかでこれは最高水準である。その意味では、今後とも本市の高齢社会対策の動向は他都市の注目を浴びることであろう。将来、「受益と負担」の構図がいかに変化しようとも、少子化問題も含めこれらの人口動態的な課題は、社会政策的にも、また、まちづくりのソフト課題としても不易のテーマとなるであろう。

従って、将来、次世代における市民要望でもこの項目に対する要望の高さに大きな変化はなく、行政課題としてもなお上位項目を維持するものと推測される。

③要望高まる「防犯・暴走」「保健・医療の充実」

この数年来、北九州市民の要望で顕著に高まりがみられるのが前出の「防犯、暴力追放」意識である。これは全国的な傾向(注4)でもあり、わが国の安全神話が揺らぐ状況にあることの反映でもある。このような心理的な側面とは別に、わがまち北九州の実際の犯罪指標(刑法犯罪発生件数)をみると、北九州市は2002年の約4万件をピークに2003年、2004年と2年連続で減少している。この間の人口あたり犯罪発生件数も政令指定都市のなかで北九州市は4位から8位に後退している。しかしそれでもなお、市民意識としての要望の強さには注目したい。警察、地域と協力しながら安全・安心なまちが実現できるよう、次世代に向けて「市民力」ネットワークが強く求められる分野であろう。

表 1-2 市政要望ベスト10の推移(91年-97年)

表 2 市政要望ベスト10の推移(91年-97年)

	1991年度	1992年度	1993年度	1994年度	1995年度	1996年度	1997年度
1位	高齢化 (1,542)	高齢化 (1,603)	高齢化 (1,353)	防犯対策 (1,416)	高齢化 (1,618)	高齢化 (1,912)	高齢化 (1,453)
2位	駐車対策 (1,441)	駐車対策 (980)	駐車対策 (1,010)	高齢化 (1,338)	駐車対策 (1,106)	駐車対策 (932)	駐車対策 (802)
3位	防犯対策 (1,062)	防犯対策 (868)	救急医療 (656)	駐車対策 (974)	防犯対策 (941)	防犯対策 (566)	防犯対策 (776)
4位	交通体系 (619)	ごみ処理 (764)	防犯対策 (513)	救急医療 (479)	商工業 (604)	商工業 (566)	ごみ処理 (552)
5位	ごみ処理 (539)	環境保全 (682)	環境保全 (512)	市役所 (459)	救急医療 (569)	環境保全 (546)	環境保全 (485)
6位	環境保全 (535)	救急医療 (557)	市役所 (506)	交通体系 (437)	市役所 (532)	ごみ処理 (544)	健全育成 (485)
7位	救急医療 (530)	交通体系 (550)	商工業 (421)	市立病院 (416)	環境保全 (509)	救急医療 (523)	市役所 (405)
8位	市役所 (370)	商工業 (507)	自然保護 (451)	商工業 (382)	市立病院 (455)	交通体系 (488)	市立病院 (404)
9位	健全育成 (365)	市役所 (433)	交通体系 (390)	環境保全 (352)	学校教育 (426)	自然保護 (454)	商工業 (394)
10位	消費者 (365)	自然保護 (386)	市立病院 (347)	消費者 (311)	交通体系 (421)	市立病院 (429)	救急医療 (341)
	11位 商工業 (357)	11位 新空港 (336)	11位 学校教育(343)	11位 道路整備(307)	11位 自然保護(407)	11位 学校教育(425)	11位 学校教育(335)
	12位 道路整備(339)	12位 市立病院(334)	12位 健全育成(321)	12位 健全育成(294)	12位 ごみ処理(346)	12位 消費者 (421)	12位 交通体系(316)
	13位 学校教育(326)	13位 健全育成(311)	13位 消費者 (316)	13位 自然保護(275)	13位 道路整備(342)	13位 健全育成(384)	13位 道路整備(307)
	14位 新空港 (311)	14位 住宅対策(306)	14位 障害者 (308)	14位 ごみ処理(273)	14位 健全育成(319)	14位 道路整備(368)	14位 消費者 (300)
	15位 住宅対策(305)	15位 道路整備(283)	15位 住宅対策(277)	15位 学校教育(268)	15位 障害者 (305)	15位 住宅対策(296)	15位 自然保護(279)
	16位 自然保護(279)	16位 学校教育(272)	16位 道路整備(265)	16位 障害者 (252)	16位 住宅対策(285)	16位 住宅対策(296)	16位 児童福祉(255)
	17位 駐輪対策(180)	17位 消費者 (266)	17位 ごみ処理(251)	17位 児童福祉(242)	17位 児童福祉(272)	17位 障害者 (295)	17位 障害者 (242)

表 1-3 市政要望ベスト10の推移(98年-04年)

	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度
1位	高齢化 (1,589)	高齢化 (1,829)	高齢化 (2,214)	高齢化 (1,516)	高齢化 (1,394)	高齢化 (1,400)	高齢化 (1,362)
2位	駐車対策 (669)	駐車対策 (632)	駐車対策 (1,011)	保健医療 (866)	保健医療 (880)	防犯対策 (1,189)	防犯対策 (1,093)
3位	商工業 (607)	防犯対策 (594)	健全育成 (876)	防犯対策 (568)	防犯対策 (717)	保健医療 (713)	保健医療 (752)
4位	環境保全 (574)	環境保全 (574)	防犯対策 (572)	駐車対策 (564)	産業振興 (608)	駐車対策 (517)	少子化 (715)
5位	健全育成 (515)	商工業 (560)	商工業 (530)	産業振興 (540)	少子化 (550)	産業振興 (506)	学校教育 (511)
6位	防犯対策 (471)	ごみ処理 (493)	学校教育 (455)	学校教育 (488)	駐車対策 (543)	学校教育 (485)	産業振興 (475)
7位	ごみ処理 (438)	市立病院 (482)	環境保全 (400)	健全育成 (419)	学校教育 (505)	健全育成 (477)	駐車対策 (444)
8位	自然保護 (392)	学校教育 (480)	市立病院 (395)	環境保全 (393)	環境保全 (457)	少子化 (453)	健全育成 (413)
9位	学校教育 (380)	健全育成 (463)	救急医療 (336)	救急医療 (385)	救急医療 (392)	環境保全 (432)	救急医療 (356)
10位	救急医療 (372)	救急医療 (450)	児童福祉 (268)	少子化 (352)	健全育成 (353)	救急医療 (421)	環境保全 (309)
	11位 市役所 (351)	11位 児童福祉(415)	11位 自然保護(349)	11位 ごみ処理(340)	11位 交通体系(344)	11位 交通体系(368)	11位 市役所 (304)
	12位 児童福祉(346)	12位 消費者 (380)	12位 市役所 (330)	12位 生活道路(323)	12位 市役所 (289)	12位 市役所 (350)	12位 交通体系(289)
	13位 市立病院(321)	12位 市役所 (380)	13位 ごみ処理(322)	13位 交通体系(306)	13位 生活道路(278)	13位 生活道路(284)	13位 ごみ処理(284)
	14位 交通体系(320)	14位 自然保護(314)	14位 消費者 (292)	13位 市役所 (306)	13位 障害者 (260)	14位 障害者 (232)	14位 生活道路(273)
	15位 消費者 (300)	15位 福祉対策(303)	15位 交通体系(283)	15位 障害者 (260)	15位 公園整備(255)	15位 ごみ処理(211)	15位 障害者 (256)
	16位 福祉対策(284)	16位 道路整備(276)					
	17位 道路整備(238)	17位 交通体系(254)					

「保健・福祉の充実」も近年とみに要望が高まっている。とりわけ、2001年度以降、従来の「救急医療体制の充実」を改称してからの伸びが目立つ。次世代のまちづくりに自助・共助が強く求められる分野のひとつとして「保健・医療の充実」も挙げられるが、その相互扶助のパワーの源泉が前出の「市民力」であることはいまでもない。人口減少時代、少子高齢時代のまちづくりには、市民の「互譲互助」の精神の高まりと「市民力」発揮の具体的、自主的なアクションが必要であろう。将来のまちづくりにもそのような視点からの仕掛けがあれば望ましい。

④要望は少しずつ後退、「駐車対策」「交通体系の整備」

長年にわたり都心地区を中心として要望が高かった「駐車対策」は、近年減少傾向にある。

様々な行政の施策対応がここにきて効果発現しているようだ。「駐車対策」は、街なかの住みやすさにとっても必須の都市環境要素であり、今後も注視しておきたい項目である。「交通体系」は、1991年には要望の4位に挙げられたが徐々にそのニーズは後退している。後で詳しく記述されるが、次世代の街なか居住を政策的に進める上では、とくに都心交通体系については大いに見直しをすべきであり、環境共生的な都心に回帰するためのまちづくり施策の是非について、早晚、市民の賛否を問う議論が大きな渦となることを期待したい。

⑤「学校教育」もここ7年間は常時ベスト10入り

表1-2に示したが、「学校教育」は90年代には概ね市政要望のベスト10に入っていなかった。唯一1995年度に9位に登場したが、他の年度では11位から順位が上がることはなく、例えば1992年度には要望が16位と低迷、36項目中でも要望は中位のランクであった。しかし、近年の7年間ではとみに市民要望が高まっており、年齢別にみても、そのニーズは子育て世代に限らず全市民的な要望の高止まりという点に注目したい。昨今の教育環境の悪化状況、青少年の

健全育成のあり方等を、市民が自らの地域問題、まちづくりの課題として視座に置こうとしているからではないか。きわめて印象深い傾向である。

1-1-2. 市民が優先評価した施策の推移

市政評価は市政要望と表裏一体の意識動向であるが、評価については、ここで1991年以降の推移を辿ることとする。市民はまちづくりのどのような側面に関心を示し、またどのようなまちの様変わりに拍手を送ったのであろうか。

(1) まちづくりに対する市民評価

-1991年～現在-

1) 97年までの推移では、環境・景観分野が最上位

①高い評価の「ごみの適正処理とリサイクル」

市民自らが市役所に協力するという意味で典型的なこの事業は、1993年以降ベスト1を維持している。市政評価では、すでに12年間にわたり最上位項目である。また、「公園の整備」「河川の浄化・整備」等ハード面のまちづくり、つまり市民の目に見える事業の成果として市民の評価が高い。この時代、市民意識トレンドとして、「自らの協力による自己実現・達成感」、「ビジブルな施策への相対的な評価のしやすさ」等が色濃く現れているようだ。

②「道路」や「景観」も高い評価

「道路の整備」や「都市景観」等、これらも目に見えるハード施策であり、この時代には市民評価が徐々に高まっていることが注目されよう。経済社会が成熟化の色合いを増してきたこの時期には、人々の意識もある意味で安定志向化してきたという背景もある。

③「観光・コンベンションの振興」も高い評価

今ひとつ安定した評価を得たのが「観光・コンベンションの振興」である。門司港レトロやスペースワールド等、いわば従来型の工業都市「北九州」発の新しい観光都市創造への挑戦であったが、この時期すでに市民の高い評価を得

ていることが印象的である。行政施策推進への評価が市民意識にすばやく反応した結果であろう。観光コンベンション都市の推進は、まちのイメージアップとなり、これまでと異なる新たな都市の個性を生み出す効果がある。とりわけ、観光により都心や街なかのにぎわいが生まれることが期待されよう。

2) 98年から現在までの特徴

①依然として高い「ごみの適正処理とリサイクル」

この施策は、この間も引き続き市政評価のトップである。長年にわたる北九州市の地道な取り組みが功を奏したことに加え、これまでのごみ減量化に対する市民の協力と自己評価、また集積が進むリサイクル工場、さらに先陣を切った環境首都づくり等を市民が好感したものであり、結果も納得できる。ごみ問題は行政のみでも、市場メカニズムのみでもうまく処理できるものではなく、次世代にも市民と一体となって進めていくべき事業である。

将来を展望すれば、この事業が息の長い市民評価を生み出しその評価が持続すれば、それはまちの「市民力」の力強さの証左となるであろう。

②「都市景観の整備」も継続して高い評価

この項目は1993年以降、10年にわたって4位から6位のランクを維持し、市民の評価が定着していることが特徴である。とくに、小倉北区や隣接の小倉南区等で市民に好感されている。近年になって概ね整備を終えた感があるが、小倉駅等リニューアルされた様々な都心の景観に対する評価でもあろう。また、都心を中心とした水辺環境の整備にも市民が拍手を送っているようだ。

③評価はやや低迷が「市街地の整備・再開発」

これに対し、「市街地の整備・再開発」は、評価の高さに僅かながら陰りがみられる。周知のように現在、全国同様、北九州市においても大規模再開発が低迷しており、今まさに新しいかたちでの「コンパクトなまちづくり」が模索される時代に入った。

表1-4 市政評価ベスト10の推移(91年-97年)

	1991年度	1992年度	1993年度	1994年度	1995年度	1996年度	1997年度
1位	公園整備(1,629)	河川整備(1,350)	ごみ処理(2,271)	ごみ処理(2,228)	ごみ処理(2,097)	ごみ処理(1,738)	ごみ処理(1,508)
2位	河川整備(1,302)	公園整備(1,301)	河川整備(1,009)	公園整備(939)	公園整備(1,226)	公園整備(1,310)	公園整備(1,083)
3位	ごみ処理(1,143)	ごみ処理(893)	公園整備(974)	河川整備(928)	河川整備(1,082)	河川整備(1,156)	河川整備(912)
4位	観光振興(1,020)	観光振興(832)	観光振興(615)	都市景観(610)	都市景観(680)	都市景観(674)	道路整備(618)
5位	市立病院(725)	道路整備(624)	都市景観(524)	観光振興(471)	道路整備(489)	道路整備(578)	観光振興(515)
6位	道路整備(696)	市立病院(622)	道路整備(493)	道路整備(409)	観光振興(484)	観光振興(574)	都市景観(514)
7位	都市景観(487)	国際交流(610)	国際交流(377)	市立病院(365)	高齢化(464)	救急医療(448)	救急医療(464)
8位	市街地(423)	都市景観(593)	市立病院(368)	国際交流(352)	救急医療(463)	市役所(437)	市役所(393)
9位	救急医療(421)	環境保全(491)	救急医療(343)	市街地(347)	港の整備(404)	港の整備(434)	市街地(356)
10位	市役所(404)	市街地(433)	市街地(320)	高齢化(342)	スポーツ(390)	高齢化(417)	高齢化(341)
	11位 国際交流(380)	11位 救急医療(388)	11位 環境保全(292)	11位 スポーツ(333)	11位 市役所(369)	11位 市街地(359)	11位 港の整備(321)
	12位 スポーツ(358)	12位 芸術文化(381)	12位 交通体系(288)	12位 市役所(311)	12位 市立病院(356)	12位 市立病院(344)	12位 国際交流(249)
	13位 芸術文化(327)	13位 防犯対策(357)	13位 市役所(269)	13位 港の整備(299)	13位 国際交流(325)	13位 芸術文化(342)	13位 環境保全(246)
	14位 環境保全(316)	14位 市役所(318)	14位 港の整備(246)	14位 救急医療(297)	14位 市街地(321)	14位 国際交流(316)	14位 スポーツ(245)
	15位 住宅対策(312)	15位 スポーツ(312)	15位 高齢化(240)	15位 防犯対策(271)	15位 芸術文化(313)	15位 環境保全(311)	15位 芸術文化(231)
	16位 高齢化(266)	16位 住宅対策(301)	16位 防犯対策(225)	16位 芸術文化(256)	16位 防犯対策(245)	16位 スポーツ(245)	16位 市立病院(229)
	17位 防犯対策(210)	17位 高齢化(212)	17位 スポーツ(209)	17位 交通体系(210)	17位 環境保全(240)	17位 生涯学習(230)	17位 住宅対策(210)

表1-5 市政評価ベスト10の推移(98年-04年)

	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度
1位	ごみ処理(2,150)	ごみ処理(2,430)	ごみ処理(2,214)	ごみ処理(2,103)	ごみ処理(2,543)	ごみ処理(2,200)	ごみ処理(2,027)
2位	公園整備(872)	河川整備(927)	河川整備(1,011)	公園整備(893)	公園整備(923)	公園整備(919)	公園整備(875)
3位	河川整備(804)	公園整備(905)	公園整備(876)	港の整備(610)	学術振興(509)	港の整備(569)	高齢化(485)
4位	観光振興(658)	観光振興(594)	道路整備(572)	学術振興(532)	港の整備(457)	都市景観(466)	港の整備(475)
5位	都市景観(577)	道路整備(587)	観光振興(530)	都市景観(496)	都市景観(456)	学術振興(440)	水辺環境(439)
6位	道路整備(474)	都市景観(509)	都市景観(455)	水辺環境(495)	高齢化(419)	学術振興(424)	学術振興(437)
7位	市街地(388)	市街地(423)	市役所(400)	市役所(401)	水辺環境(412)	芸術文化(382)	都市景観(433)
8位	救急医療(366)	市役所(395)	救急医療(395)	高齢化(353)	市役所(396)	高齢化(374)	芸術文化(309)
9位	港の整備(365)	市街地(337)	市街地(336)	市街地(336)	市街地(296)	市役所(355)	物流拠点(289)
10位	高齢化(330)	救急医療(324)	高齢化(268)	環境保全(309)	環境保全(227)	環境保全(296)	市街地(288)
	11位 芸術文化(257)	11位 港の整備(289)	11位 環境保全(237)	11位 観光振興(265)	11位 生活道路(249)	11位 観光振興(284)	11位 救急医療(284)
	12位 市役所(245)	12位 市立病院(263)	12位 市立病院(231)	12位 交通体系(248)	12位 救急医療(231)	12位 市街地(283)	12位 市役所(282)
	13位 市立病院(227)	13位 芸術文化(255)	13位 国際交流(179)	13位 生活道路(238)	13位 芸術文化(198)	13位 救急医療(252)	12位 環境保全(282)
	14位 交通体系(210)	14位 環境保全(244)	14位 国際交流(179)	14位 救急医療(228)	13位 交通体系(198)	14位 保健医療(233)	14位 生活道路(210)
	15位 国際交流(196)	15位 生涯学習(188)	15位 芸術文化(178)	15位 物流拠点(201)	15位 地域活動(196)	15位 自然保護(215)	15位 保健医療(204)
	16位 スポーツ(185)					16位 物流拠点(194)	
	17位 環境保全(184)						

1-1-3. 市政評価と要望からみた市民の行政施策ニーズ

1) 住みよさを肯定する市民が求めるもの

2003年度の市民意識調査（注4）では市民の86%が北九州市は「住みよい」としたが、この肯定グループでみても、やはり「高齢社会対策」「防犯、暴力追放」「保健・医療」等への要望が高いことがわかる。また、今なお大都市間の共通課題である「駐車対策」はじめ、「産業振興」「救急医療体制」「青少年の健全育成」等全国的に行政の優先課題となりうる施策のニーズが高い。

2) ニーズの第1位は「防犯、暴力追放運動の推進」

ここで、市民の期待水準（要望）と達成水準（評価）の差（要望スコア－評価スコア）を「ニーズ」スコアとすると、結果、「防犯、暴力追放」が最も喫緊の市民ニーズとなって現れた。これに前出の「高齢社会対策」が続き、3位には「駐車対策」も大きなニーズとなって登場した。こうして「住みよい」と肯定する市民が、更にいかなる行政対応を求めているのかが見えてくるようだ。なお、ここでは言及しないが、「住みよさ」の否定グループも概ね同様の意見であったことを付け加えたい。

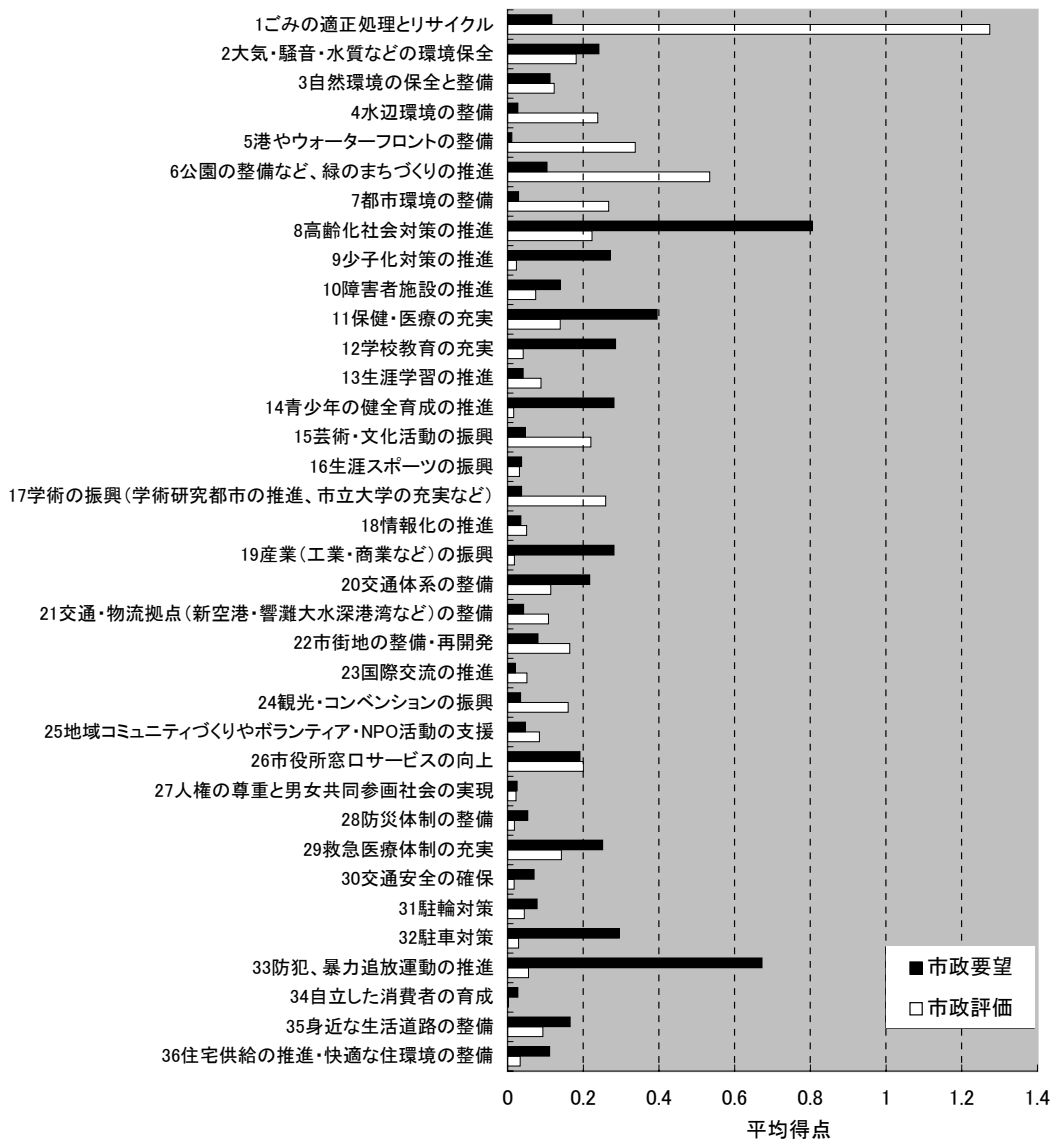


図 1-1 肯定的評価グループの市政要望・評価

1-2. これまでの「まちづくり」と市民の評価 - 住みよいまちへの条件 -

(1) これまでの「まちづくり」、市民はどう評価したか

1) もっとも高い評価を得た分野は「まちの景観」

1988年に策定された北九州市ルネッサンス構想以降、市民、行政がともに進めたまちづくりに対しどのような点を市民が評価したのか、ここでは概ね過去15年間の推移を2003年度調査(注5)によって検証した。結果によれば、この15年間で総合評価として、「まちの景観」が最もよくなったとする回答が多いのが注目される。市民の7割以上が景観の向上を認めている。たしかに、都市の顔である都心のリニューアルはもちろん、様変わり著しいまちの姿に市民は好感をもっている。しかし、まちづくり全体の高い評価とは別に、個別に街区等をみると、まだまだ改善すべきケースは目白押しである。ちなみに、市民の声としては、「小倉駅や紫川周辺、特にリバーウォーク北九州が良い」「門司港レトロの整備」等をプラス評価しているものの、「古い町並みや建物を安易に壊さないで」とするマイナス評価も健在であった。

2) 要素ごとにみる評価の15年間の推移

①「まちのにぎわい」

5年前と比べて「かなり良くなった」「少し良くなった」を合わせたプラス評価層(好感派)は1992年時点では38.5%だったが、1998年には71.4%と飛躍的に多くなり、直近の2003年調査でも約6割を維持し「まちのにぎわい」を好感する意見が目立つ。市民の声として「明るい街になった」「博多ほどではないが以前よりよくなった」とする反面、「古いまちの個性や魅力の喪失」を訴える意見も出された。

②「買い物の便利さ・楽しさ」

この要素も都市の魅力度を計る典型的な指標といえるが、前出の好感派をみると、この15年間であまり大きな変化はみられていない。ただ

しプラス評価層は各調査時点いずれも50%を超えている。とくに指摘したいのは、逆に「かなり悪くなった」「少し悪くなった」とするマイナス評価層が1992年の22.7%から近年は大きく後退したことである。とくに都心のリニューアルが市民の好感度に寄与したことはまちがいないと思われる。

③交通の便利さ

交通体系の整備は、現実となった新空港の開港を含め市民の好感度は高い。もちろん、過去の実績としてモノレールの小倉駅乗り入れ、黒崎バスターミナルの整備等市民が実感できる利便性向上がその背景にある。一方で、大都市の共通の課題である「交通渋滞」への不満や市街地バスの増便等の要望もある。

表 1-6 まちづくりへの市民評価

単位：%

調査項目	調査年度	プラス評価層	マイナス評価層
1. まちの景観	03年	71.0	5.9
	98年	77.4	3.6
	94年	70.5	3.4
	92年	63.5	7.5
2. まちのにぎわい	03年	59.9	16.5
	98年	71.4	9.4
	94年	50.2	6.0
	92年	38.5	14.7
3. 買い物の便利さ・楽しさ	03年	51.8	10.4
	98年	59.4	3.6
	94年	53.6	2.7
	92年	56.0	22.7
4. 交通の便	03年	60.5	6.0
	98年	67.6	4.8
	94年	50.5	6.9
	92年	46.4	8.9

(2) 住みよさと市民の評価

- 北九州市民が求めるもの -

1) 住みよさのために優先される分野

それでは、今後、北九州市民はどのような都市の要素を重視するのであろうか。(注6)

結果をみれば、「全体」では「公共基盤」「自然」が重視されるが、「北九州」では「経済」「公共基盤」の重みが関東首都圏を主とする「他都市」

に比べかなり高いのが特徴である。一方、「他都市」では相対的に「居住」「自然」等への重みが高かった。

総じてサンプル数が少ないため、厳密な比較はできないが、北九州市民と首都圏の市民とでは明らかに「住んでみたい都市」の理想の姿は異なるようだ。

表 1-7 住みよさ要素7分野の「重み付け」結果

	自然	居住	経済	公共基盤	文化教育	健康安全	都市イメージ
全体 N=233	15.2	15.6	14.3	17.2	12.7	15.5	9.5
北九州 N=103	13.3	13.0	16.7	20.0	12.7	14.8	8.5
他都市 N=130	16.5	17.8	12.4	15.0	12.4	15.7	10.2

2) 北九州市民にとっての「住みよさ条件」

具体的に、北九州市民が地域の住みよさを実感するための条件は何であろうか。前出 2003 年の市民意識調査結果では、「買い物利便性」「交通利便性」「医療の充実」等、日常生活に密接に関連した項目のほか、やはり「治安の良さ」が重視されており、市民が安全・安心を求める近時の世相が色濃く反映している。(図 1-3 参照)

これまで記述してきた北九州市民の意識トレンドがここでも確認されている。

1-3. 「街なか居住」と市民意識

(1) 今後のまちづくりに望むものは何か

ここで、北九州市都市計画マスタープラン策定のために 2001 年に実施された市民意識調査(注 7)を最後に取り上げよう。結果のなかで、北九州市民が今後の重点的なまちづくりとしてその整備を望むことのトップは、「人が集まる街なかの交通整備」であった。次いで、「大気・騒音・水質等の環境保全対策」が 2 位で続き、3 位が「高齢者や子育て世代にも利用しやすい公共施設の整備」となった。要素でいえば、「交通」、「環境」、「公共施設」の順に市民のプライオリティが高い。

われわれがとくに注目したいのは、「街なかの交通整備」(45%)への約半数に及ぶ市民の熱い眼差しである。これは、とりもなおさず市民の、都心や中心市街地への「時間的」「空間的」利便性向上志向を雄弁に物語っている。やはり人々は街なかへの移動の自由さ、便利さ、つまりは都心や市街地での買い物やレジャー、時間消費の楽しさをいつの時代にも優先的に求めるようだ。

調査結果は、一方で、大規模な公園の整備や幹線道路の整備、また河川・海岸等親水空間の整備、さらに都市景観の整備等への要望は低く、相対的にあまり市民は望んでいないことが分かる。これらのまちづくりや都市環境の整備は、北九州市においても概ね完成しており、市民意識としての要望もかなり後退している。

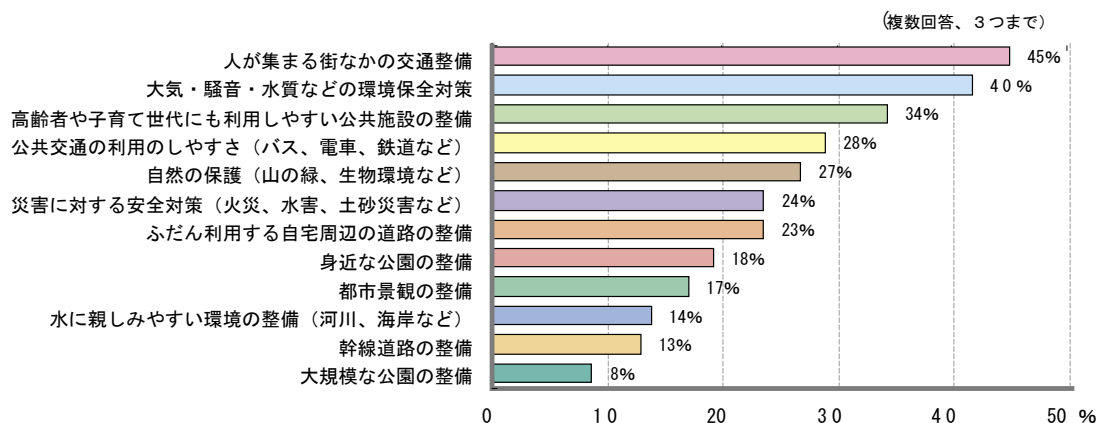


図 1-2 重点的な整備や取り組みを望むこと

(2)「街なか居住」は選好されるのか

ところで、わが国は2030年までに930万人強の人口減が見込まれている。このような時代には、従来型の「ひとの住むところすべてに資本投下すること」は不可能であり選択と集中による資本投下にならざるを得ない。その場合、既存ストックを活かしながら、駅を中心とする徒歩圏内の街なかへ人口集中や都市機能の集中を行なうことが求められてくる。いわゆるコンパクトなまちづくりである。このことは、次世代のまちづくりの統一理念となりつつあること、周知のとおりである。

さて、同様の調査によると、北九州市民が今後「住みたい場所」は、「まちの中心の周辺部」が4割でトップであり、「生活に便利なまちの中心部」も4人に1人がこれを求めている。そして、これらを合わせた約7割の市民が、いわゆる郊外よりも「街なか」を選好していることに注目したい。

わがまち北九州でも、街なかは市民の求める「終の住処」として光が差し始めたようである。「住まい」に限らず、街なかにおける消費行動やレジャー、ワークスタイル等、次世代へ向け市民の意識、価値観そしてライフスタイルは今後どのような変化をみせるのであろうか。今後も注視していきたい。

これからの「良い」まちの定義は、人口拡大時代のように、「良い都心、良い街なかにひとが集まる」のではなく、「ひとが集まる都心、ひとが住む街なかが良いまち」となるのかもしれない。人口減少が必然となる次世代の北九州市の「街なか」はどんな姿になるのだろうか。

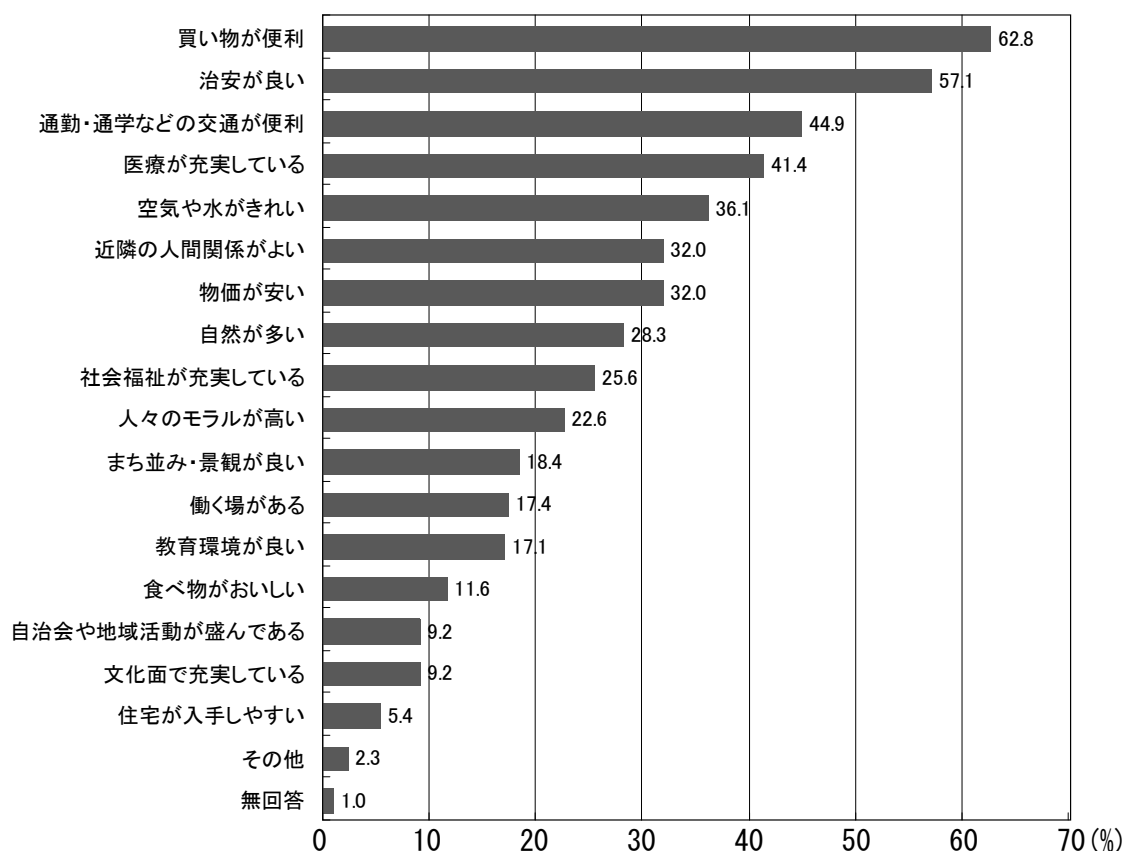


図 1-3 「住みよさ」には何が必要か

1-4. まとめにかえて

—都心は「蘇生」できるか—

30年後の次世代における人々の生活意識、つまり心は正確には見えない。ただ次世代で確実なことは、わが国の平均寿命が2015年に男性80歳、2030年には女性がなんと90歳（いずれも国連推計）になるということである。長寿大国のわが国であればこそ、わがまちの姿も、それを長生きさせるにはそれなりの蘇生力（シントロピー）が必要である。幸いにも「再生」のみでなく「蘇生」でも良ければ、まちは生まれ変わる必要はない。昔から持っていた姿を蘇らせること、若返る必要があるだけだ。そしてまちの若返りのためには、まず都心の古い磁石にパワーを持たせ魅力を再構築することである。まちの都心は酸化（エントロピー）し、死んだ都心でなく、古い細胞がふたたび活性（再整備）するように、若返らせるのである。

身体にたとえるならば、とくに大事な心臓は都心である。身体は加齢とともに活性酸素にやられ生活習慣病を発症する。このため身体の酸化を防ぐ抗酸化のパワーが必要だ。都心の場合にはそのパワーはたくさん必要だが、なかでも市民の『住みつづけたい心』や『コミュニティ豊かで人間性溢れるまちであり続けたいこと』を意識として共有することが重要ではあるまいか。そして、ハード面から街なかを蘇生させるため、『うるおい溢れる高品質な都心づくり』を進めることが次世代へ向けたまちづくりの道程に求められている。

補注

- (1) 北九州市広報室広聴課(1986)「昭和61年度広聴はがきのまとめ-62年度予算に何を望むか」調査。選挙人名簿より市民3,000人を抽出、往復はがきによってアンケートを実施。
- (2) 昭和62(1987)年度に調査方法が「広聴はがき」調査から、特定テーマの市民意識調査の

付帯調査として同時実施の方法に改められ、要望項目も24項目から33項目へと拡大。

- (3) 内閣府政府広報室(2005)「国民生活」調査によれば、「政府に対する要望」項目のなかで「犯罪対策」が、98年の25.9%から昨年04年には37.0%に増加し、「少子化問題」とならんで要望が拡大していることが明らかにされている。
- (4) 北九州市広聴課(2003)「住みよさを感じて誇りをもてるまちづくり」。市民が安心して生活できる、住みよい環境のまちにしていくための課題を把握するためのアンケート調査。実査は2003年10月10日～31日。市内居住の20歳以上の男女個人(在住外国人30名含む)3,000人を対象として郵送法により調査した。回収数は1,745(58.2%)
- (5) 北九州市企画政策室(2003)「これからのまちづくり」。ルネッサンス構想以降のまちづくりに対する市民の評価と、今後のまちづくりへの課題等を把握するためのアンケート調査。実査は2003年9月16日～10月16日。市内居住の20歳以上の男女個人3,000人を対象として郵送法により調査した。回収数は1,696(56.5%)
- (6) 北九州都市協会(2005, 3月号)「ひろば北九州」pp. 12-13を参照のこと
- (7) 北九州市建築都市局(2001, 12月)「市民意識調査」。まちづくりに関する市民の意識を把握するため実施されたアンケート調査。市内在住の18歳以上の男女個人5,000人を対象として郵送法により実施。回収数は2,595(52%)。